

文芸

俳句

夕食へめぐらしつまり冷奴
池田 逸子
コンバイン稲穂の波を蹴立てけり
伊藤 敬子
薄物うすもののためらひまよふ秋暮かな
今関満喜子
仕事終へ土に戻りし刈田かな
魚地 照子
秋めくや雲の形の変わり来し
江森 悦子
お月見や昔団子今ケーキ
大谷 武彦
無住寺や盆の月浮く手水鉢
川島 孝夫
関八州黄金に染めて望の月
川島 通則
豊作を祈り霊山仰ぎけり
向後 寛
名残り惜し庭に乱舞の帰燕かな
越川 せつ子
藍深く澄みて月光いよよ輝る
越川 福子
研みあげし包丁名月かざしけり
越川 義則
幼子がぶかぶか靴の秋をばく
小松 藤男
汗の手の砂かき寄せる甲子園
佐瀬 輝夫

名月や老いゆくあせり出ぬ言葉
鈴木とし子
今日の月引き寄せられるまで見つめ
鈴木 利子
水すまし波紋奏でて走りけり
玉虫 栗扇

畑起こす背なにかきびしき残暑かな
土屋美枝子
リハビリに励む日のあり今日の月
土屋 義昭
我が家今霧のベールに包まれし
戸村 静草

寂しさよまんまる月に向いかける
西崎さち子
日ぐれにはまだある刻や風仙花
早川 勇

短歌

白ひとつ紫ふたつと朝顔の
数かぞへるが朝の樂しみ
吉岡 信子

冬の日の陽射しのやうな温もりと
私に呉れたご夫婦ごごでありたり
八角 三枝

稲と刈る息を旁うにコンバインの
中は冷房と笑ひ言ふなり
青木 秀子

穂孕みて風に揺れぬる稲見つつ
汚染地域の農家思へり
鈴木まさ子

匂いなく色も見えざる放射能と
気にかけて畑に大葉摘みぬつ
押尾 輝子
隣家の軒の風鈴今日もまた
らりんらりんと響きぬるなり
平山 芳子

最後まで独り暮らしを貫くと
水中ウォークまた始めたり
田崎 尚美

盆終り夫の御霊の帰れると
親族揃ひて角まで送る
芹川 初子

ふる里の三嶋大社の境内に
咲く木犀の香に包まれり
西山満里子

熱中症の注意うながすニュース聞き
節電厳しき職場へ向かう
島田ますみ

四年余と病み臥しぬますとき子さんに
朱鷺の置物佐渡に購ふ
斉藤つね子

原子力災害事故の恐ろしさ
平和な日本に不安がよぎる
鈴木 益郎

みはるかす北の大地の道はるか
麦秋すぎで黄金の穂並
高梨 キヨ

何気なく頼るともなく頼りいし
病む身となりし妻を介護す
伊藤 定男
香き日の帰らぬことと知りつつも
しみじみ仰ぐ十三夜の月
土屋 好

こうほう博物館 43

足の形をした焼き物

平成十二年から始まった
芝崎遺跡群の発掘調査で、
その後半に調査した中島遺
跡から、変わった形をした
焼き物の破片が出土しま
した。

この三足壺は、元々は中
国の鏡かがみと呼ばれる器を模し
たもので、特別な儀式ある
いは貴重なものを入れるの
に使われたと言われます。

初めは急須の口か砥石か
と思ひ、しばらく出てきた
ところにはあったらかしに
ていました。ある時、それ
をふと手に持って水で洗っ
てみて驚きました。急須の
先のような丸い出っ張りに、
爪のような細工がしてあり、
象の足のような形をして、
何かの器の底に付いていた
かのようでした。色は灰黒
色で硬く焼きしまっていて、
須臾器と呼ばれる愛知県方
面で作られたものと思われ
ます。そして、足の付く器
の類例を調べたところ、
足壺あしづか、三足壺さんそくづか、あるいは獸
脚付盤けつぷくばんなどがあり、いづれ
も中央宮殿や寺院などで使
われたと言われます。

な物を捜したところ、他に
二点出てきて、それらは接
合しませんでした。壺で
あることが分かり、三足壺
であると判明しました。



▲中島遺跡から出土した獸足片